SAMPLE
STIGMA
Side-Koichi Vol.2
For Adults Only

STIGMA Side-Koichi Vol.2　SAMPLE

とりさん

※以下本編より抜粋。
※書式は本編と同一です。あなたの環境での表示を確認して下さい。
※本編は全８章。約四〇〇〇字。挿絵一枚。
※本編には伏せ字等はありません。

※　本サンプルも成人向けです。また無償ですが、特に部分を切り抜いての　再配布は絶対に避けて下さい。

SAMPLE

1

はじめてのお泊まりから丸一週間以上、セックスはお休みだった。ぼくのおしりは三日ぐらいでよくなったし、正直、おじさんがやろうっていわないかな、って土日はちょっと期待した。だっておじさんはこうふんしていればぼくが少しぐらいいたがっても入れちゃうんだったし。

でもおじさんは、土日、お風呂に一緒に入り、ぼくの全身をやさしく抱いたりなでたりしてくれたけど、もうぼくがぼっきしているのをわかっていて、おちんちんにはさわらないし、おしりには指も入れなかった。おふろを上がってからもはだかで、ぼくにオレンジのエプロンだけさせていっしょにそうめんをゆでたりハムを切ったりした。エプロンはすき間だらけで、ぼくのおちんちんがふくらんでかたくなったり、またしぼんだりしているのも、おじさんはよくわかっているはずだった。

でもよく考えると何もしてないのにこんなにエッチな気分になっておちんちんをかたくしているぼくが「普通」でなさすぎるのかもしれない。お泊まりの日の最後にも言われた。かっ手におちんちんをいじったりするとくせになるって。セックスの楽しさがうすれてしまうって。

おじさんはセックスがいけないとかやめようとか思っているわけでは決してなくて、もっともっと気もちいいように、楽しいように、っていうことを考えてるんだろう。そう思った。

SAMPLE

夏休みの初日。お泊まりじゃないけど午前中からおじさんの家に行って、ぼくはずっとはだかで、おじさんはシャツと短パン。じゃれあったりすると、ぼくがぼっきしてたり、からだがピンクになって熱くなってたりするのも全部わかってしまう。ぼくははずかしくて、逆にプロレス技みたいにはげしくおじさんに組みついた。もうエッチなことしてよ、触ってよ、ぼく自分ではしないって約束も守ってるよ、って口に出しそうだった。

ぼくを床に組みしいたおじさんは、ちょっと熱っぽい目でぼくを見下ろしていて、ぼくはむねがしめつけらるのを感じた。ああ、きたいできそう、って思った。

「幸一、どんなことしてほしいいんだ」

「おしりはいらないのか」

おじさんはぼくの頭を強くなでてくれ、だきしめて、キスして、そのままだきあげてベッドまで運んでくれた。

†

SAMPLE

ぼくをベッドに寝かせると、ベッドの横の机から、おじさんはローションのプラスチックびんを出した。あれを使ってもらうと、それまで痛かったことも気持ちよくなる。ぼくは期待感でドキドキした。

やっぱりローションもつばもなしだとまだいたい。おじさんはローションを手にとってぼくのをその手でつつんでくれる。最初に冷たさ、そしてあたたかさ、ぬるぬるした指がすりこまれる気もちよさ……ぼくは声を上げる。

「ローターっていうおもちゃだよ。おもちゃって言っても、普通幸一みたいなｕｕは使わないけどね」

「大げさだなあ幸一。このローターより私のの方が太いだろ。このぐらい平気だろ」

「言わないんなら、途中でやめちゃうぞ幸一」

おじさんだって気もちいいんだから、やめたりしないと思うけど、ぼくは言わなきゃ。

「もっとして、もっとついてほしい……」

SAMPLE

2

「苦しそうに見える？」
「うん」
「でもやられてる人は、よろこんでるんだよ。苦しそうな顔でね」
「そうなの……」
お母さんの顔……ぼくの、セックスの時の顔……。

「ペットごっこをしてみよう。今日はいたくないようにしてあげる。と中でいやになったら、やめてあげるよ」
ぼくの心を読んだように、おじささんは言った。ぼくは受け入れるしかなかった。

†

「あ……ふ、あ……これ」
「気もちいいか幸一」

SAMPLE

ぼくは返事できない。

「いたくはないだろう？」

ぼくは手かせのついた手でおなかを押さえながら、やっとうなずいた。いたくないけど、何だか体に力が入らなくて、変な感じ……。

おじさんはバイブレーターのコントローラーを、細く切ったガムテープを何本も使ってぼくの内またにとめた。

「ペットのポーズでもしてもらおうかな。『ちんちん』って知ってる？」

ぼくはうなずいた。四つ足の犬なんかが、立ち上がるようにして前足を出すやつだ。

「ごほうびはおさん歩だ。外に連れて行ってやるから楽しく遊ぼうな」

3

「幸一やっぱりヘンタイの犬だなあ。こんなんでも気もちよくてぼっきしてるんだから。あとで満足させてやるから、先にご主人様のを気持ちよくするんだ」

SAMPLE

こうしていると本当におじさんのペットになった気分だ。おしおきはいやだけど、じっさいにおじさんのペットになれるなら、それもいいなあ、とか思った。おじさんの子どもが、無理なんだったら。だっておじさんの言うことだけきいて、学校とか、親とか、人間のめんどうなこと、何も考えなくてすむもの。

「ご主人様はどれいにはごはんぐらい食べさせるのが当然だ、そのかわりいいどれいになれよ」
とおじさんはぼくの頭をなでる。一回二回のゲームじゃなくて、セックスの時はもちろん、そうでないときも、おじさんはぼくをペットやどれいあつかいした。ぼくはおじさんのものになれるなら、息子でなくても、ペットでもどれいでもいい、って本気で思っていた。

「ああ。言うことをきかないどれいなんて、できそこないだろ。いらないよ」

SAMPLE

「この部屋を見せるのは本当に特別な子だけだ。幸一は選ばれた子さ。さあ、どうする。今日これを全部おためしで味わわせてあげる。いやならそれまで。あと、味わってからやっぱり無理だった、でもかまわないことにしよう」

続きは本編で！

SAMPLE